

熱帯低気圧のうち、北西太平洋と南シナ海に存在し、最大風速が34ノット（17.2m/s）以上になったものを台風と呼びます。

低緯度の海水温が高い海域で発生した台風は、はじめ貿易風により西進しますが、地球自転の影響などで次第に北上し始め、中・高緯度に来ると上空の強い偏西風により、速度を速め東寄りに向きを変えます。

台風のエネギー源は、水蒸気が凝結する際に放出される潜熱で、海水温の低い中・高緯度に達したり、陸地へ上陸し供給が断たれると、しだいに勢力を弱めて温帯低気圧や熱帯低気圧へと変わります。

発生から消滅までの期間は平均で5.3日で、年間の発生数は25.6個、全国での接近は11.4個、上陸は2.7個となっています。また月別の発生・接近・上陸数はグラフのとおりです。

昭和の三大台風といわれる室戸・枕崎・伊勢湾台風は、いずれも9月に上陸していますが、大型の台風はほとんどといってよいくらいこの月に上陸しています。これは、日本近海の海水温がこの時期まだ高く、台風のエネギー源である水蒸気が豊富であることと、日本を覆っていた太平洋高気圧が次第に後退する時期で、高気圧の縁辺を発達したまま早い速度で日本に近づくためです。

台風による災害は、暴風をはじめ大雨による土砂災害、水害、高潮等がありますが、秋雨前線が停滞していたりすると、まだ近づくずいぶん前から発達した積乱雲によって大雨となったり、竜巻が起きたりすることもあります。台風の中心の動きだけに着目する傾向がいまだ見受けられますが、台風に伴う風速は、中心から数十km離れたところが最大なのです。

台風を立体的に捉え、進路予想図で示される強風域や暴風域が、いつ頃影響しはじめるかなどにこそ注意すべきで、その意味からも台風情報には早いうちから気をつけ、風が強まる前に対策をとり、状況によっては避難まで想定しておく事も必要なのです。

台風の月別発生・接近・上陸数の平年値（1981～2010年）

